大豆情報 No. 2

令和8年6月 30 日
十日町農業普及指導センター

単収 220kg 以上、２等級以上を目指して
中耕・培土は遅れずに２回実施しましょう！

１　中耕・培土

<u>湿害や倒伏、雑草害の軽減に加え、大豆の生育を促進する重要な管理作業</u>です。
収量・品質の向上のため、確実に実施しましょう。

（１）期待される効果

○雑草防除　○倒伏防止　○表面排水
○根系の発達　○根圏の改善

→ **生育促進、収量・品質の向上**

養水分吸収に優れる不定根は、播種後 20～35 日の培土によって、最も発生が多くなります。土壌が乾燥した状態では不定根は出ません。

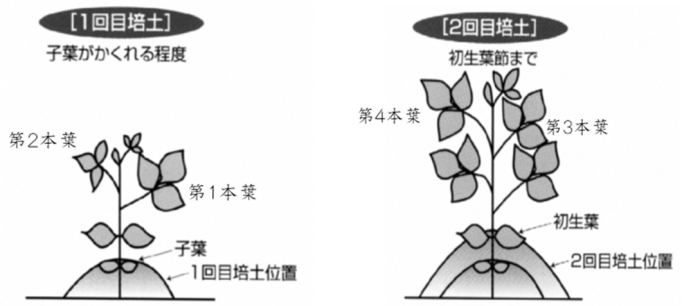
（２）中耕・培土の時期

時期	大豆の生育	は種後日数	程度
1回目	**本葉２枚目展開頃** 主茎長※12～15cm 程度	20～25 日頃 （は種後 20 日以内は土寄せにより生育抑制）	子葉節まで
2回目	**本葉５枚目展開頃** 主茎長※20～30cm 程度	35～40 日頃 （１回目の２週間後～開花始めまでに実施）	初生葉節まで （高過ぎると収穫時に「汚損粒」の発生要因となる）

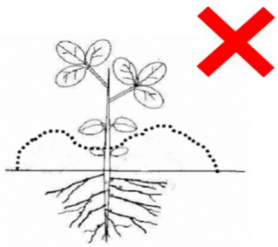
※地際から最上位葉の付け根までの高さ

（３）作業のポイント

ア　<u>最終培土時の高さは地表面から 15cm 程度</u>とする。培土が高いと、土砂のかき込みによる汚粒の発生や刈取り位置が高くなり、収穫ロスが出やすくなる。
イ　株元に水が溜まると湿害や病害を招くため、<u>株元がへこまないよう培土</u>する。
ウ　<u>作業の晩限は開花始めまで</u>とする。開花期以降の培土は、断根により生育抑制や落花、落莢の原因となるので行わない。



【不適切な培土】



２　梅雨時期の排水対策

降雨の前後に明きょを点検し、滞水が生じないよう必要に応じて溝の手直しを行いましょう。
また、中耕・培土終了後は速やかに畦間を明きょに連結しましょう。

３　追肥

低地力が原因で収量が低いほ場では、緩効性肥料（シグモイド型被覆尿素 60 日タイプ）を、２回目の中耕・培土時に窒素成分で 10a 当たり６～８kg 施用しましょう。

４　雑草対策

（１）　収穫時に雑草が残ったままだと、汚粒の発生原因となり、品質低下を招きます。中耕・培土のみで雑草を抑えられない場合は、雑草種に応じて適期を逃さずに茎葉処理除草剤を使用しましょう。

（２）　帰化アサガオ類を見かけたらすぐ抜きましょう（詳細は大豆情報 No.１をご覧ください）。

（３）　適用雑草、散布時期や量、散布方法については、農薬のラベル等を必ず確認しましょう。

図１　帰化アサガオ類

５　病害虫防除

（１）アブラムシ類

ア　吸汁害の他にウイルス病を伝搬し、褐斑粒の発生を増加させます。また、夏季が高温な年には発生量が増加します。

イ　種子塗沫処理剤の効果は約１か月程度であるため、は種後１か月以降の発生に注意し、発生が認められたら殺虫剤を茎葉散布しましょう。

（２）ウコンノメイガ

ア　雑草の多い山間地近くで発生が多く、は種時期の早いほ場や生育が旺盛で葉色の濃いほ場、７月中下旬の降雨が多い年は被害が多くなる傾向があります。

イ　葉巻の発生をよく観察し、７月中旬以降に葉巻が見え始めたら、下記防除のめやすに従い遅れずに殺虫剤を散布しましょう。

表　ウコンノメイガの防除のめやす

時　期	畝１ｍ当たり平均葉巻数と防除対応
７月第５半旬	６個以上では防除必要
７月第６半旬	24 個以上では防除必要

注　縁がわずかに巻かれた葉も葉巻として数える

図2　ウコンノメイガの加害の様子

（３）ハダニ類

ア　葉裏に寄生し、増殖が進むと葉を黄化させます。夏季（特に８月以降）が高温になると、急激に密度が上昇し、稀に多大な被害（子実小粒化で減収）を及ぼす恐れがあります。

イ　前年度発生したほ場は発生に注意し、多発生が予想される場所は殺虫剤を早めに散布しましょう。ほ場全体に拡散していない場合は、密度が高い部分のみスポット防除を行いましょう。

農薬の使用前に必ず登録内容を確認！
周辺ほ場の農作物に飛散しないよう十分注意！

【問合せ先】十日町農業普及指導センター作物担当　電話　025－757－6061